

## ピアノ アドバイザー



### 新井 啓泰

佐野市出身。

白鷗大学足利高等学校を経て、東京藝術大学を卒業。文化庁在外研修員として渡欧し、ドイツ国立ハンブルク音楽大学、イタリア・ペスカーラ音楽院にてディプロムを取得する。帰国後、国立音楽大学大学院にて修士号を取得。

学生音楽コンクール第2位、日本クラシック音楽コンクール第3位、栃木県ピアノコンクール大賞、埼玉ピアノコンクール大賞、かずさアカデミアピアノコンクール第1位、日本室内楽コンクール入賞、ABC 新人オーディション合格、イタリア・カラブリア国際ピアノコンクール・ディプロマ賞など、国内外のコンクールで入賞多数。

これまでに安井耕一、黒川浩、故・堀江孝子、故・中島和彦、大竹千鶴、R. ナットケンパー、B. メッツェーナの各氏に師事。

マスタークラスで、V. マルグリス、B. グレムザー、J.M.ルイサダ、故・北川正等の各氏に指導を受ける。

2010年及び12、14、15、17、18年に東京文化会館や浜離宮朝日ホールにてソロリサイタルを開催。40年の歴史を持つ演奏会「第九と皇帝」にて、2012年東京文化会館大ホール、2016年及び2020年にサントリーホールにて「皇帝ソリスト」を務めた。

室内楽の分野では「Spiga Quartet」「Trio Embellir」を主宰し、毎年公演を重ねている。

宇都宮短期大学音楽科教授、フェリス学院大学講師。全日本ピアノ指導者協会ピティナ正会員。

## 1. お客様の笑顔をイメージする

まずお客様がコンサートが終わったとき、どの様な気持ちで帰途に着かれるかを想像しましょう。楽しかった、感動した、素晴らしい音だったと感じてもらえる本番を作り上げたいですね。それは一つの映画を見る様な感覚に似ていると思います。普段と違う空間に身を置き、音はスクリーンの様に色や景色を映し出し、お客様の五感を刺激して物語に誘って行く、それが演奏家の役目です。



## 2. ホールに到着したら

私が演奏会場でいつも行うルーティーンは、まずそのホールの好きな客席にゆったりと座り、天井の高さや照明を眺め、匂いなどを感じ、深呼吸をして空間との一体感を感じるように、リラックスします。次に散歩する様に歩いて回り、前方や、真ん中、2階席など色々な位置で音を出してみるのです。手や指をいろんな風に鳴らします。「パーン！！」「ポーン・・・」「パチッ！」など、または「あー」と声を響かせてみたりもします。残響や余韻を感じ今日のプログラムとホールがどう馴染むのかを想像します。大迫力の音量や、遥か遠く、天から降ってくるようなイメージの音が、どうお客様に届くか、想像をめぐらせる楽しい時間です。コンクールや試験の会場ではできない事ですが、その分、他の人の演奏を参考にするように心がけましょう。どんな音域が響きやすいのかなど、あらかじめ気づいておくと、ステージ上でできる事に幅が出てきます。

## 3. ホールでのリハーサル～最高のパフォーマンスをするために～

会場でのリハーサルは、本番に向けた最終の調整の場です。様々な形態の演奏に向けたリハーサルではどんな事を確認しているのでしょうか。

### ・ソロのリハーサル

可能であれば専門の方に同伴してもらい、自分の耳だけでなく多くの耳で様々なチェックをするのが理想です。バランスや、音色、音量などは自分が手元で聴いているのとは違うように聴こえていることがよくあります。十分滑らかに弾いているつもりが伝わっていなかったり、気持ちよく響かせていたら、客席にはうるさくなっていたりなど。同伴者がいなければ録音してみるのもいいでしょう。とても冷静な判断が必要です。リハーサルでがむしゃらに弾いてしまうような時は、いい本番になることは少ないです。



### ・室内楽のリハーサル

複数人のリハーサルはプレイヤー各々の準備のペースがあり、自分一人の世界に入り込むのはよくありません。楽器の配置を決めたり、バランスの確認をすると、座る位置10センチの移動で変わる響きの具合等もあり、神経質な調整も含まれます。それぞれが納得して気持ちよくリハーサルを終えられる事が、本番へ向けてモチベーションを上げるためにとっても大事なのです。

また「楽器によるホールでの音の広がり」があります。狭い部屋で小さく聞こえた弦楽器が、ホールでは十分に響いていた！など驚いた経験がたくさんあります。またピアノはポーンと高方に音が飛びますが弦楽器は横に流れるように響くと私は感じています。これらは一つ一つ気づいて経験していくしかありません。

また「楽器によるホールでの音の広がり」があります。狭い部屋で小さく聞こえた弦楽器が、ホールでは十分に響いていた！など驚いた経験がたくさんあります。またピアノはポーンと高方に音が飛びますが弦楽器は横に流れるように響くと私は感じています。これらは一つ一つ気づいて経験していくしかありません。

### ・オーケストラとのリハーサル

50人といった大人数のオーケストラと共演するとき、リハーサルのときから、ソリストとしてすごい実力を見せよう！などと思っははいけません。その気持ちは本番にとっておきましょう。まずは全員が息を合わせられる、呼吸できる音楽をすることが大事です。

オケのプレイヤーもソリストと一緒に音楽を感じ、楽しみたいのです。オケのソロパートと音を重ねるとき、複数のパートとポリフォニックに紡いでいくとき、Tutti(オケの総奏)と対話するとき、どんな呼吸をしたら、呼吸を与え